1977 年 12 月 3 日　第 3 種郵便認可　毎月 18 回(1,2,3,5,6,7 の日)発行　2013 年 7 月 4 日発行　SSKP　増刊通巻第 5440 号

自立生活センター・小平　通信

生活を豊かに彩る「ゆにーく　ゆあ　らいふ！」　SSKP

ゆにーく your らいふ

追　　悼

落合勇平

目　　次

この通信について　・・・　ｐ　３
落合勇平　年表　・・・　ｐ　４

追悼メッセージ
川元恭子（代表・担当 GM）　・・・　ｐ　５
小野田貴光（担当コーディネーター）　・・・　ｐ　６
障がい者職員　・・・　ｐ　７
ヘルパー　・・・　ｐ１２
健常者職員　・・・　ｐ１８

「田無タワー　オカンとボクと、時々、オトン」
連載全８回　一挙掲載　・・・　ｐ２８

落合勇平をめぐる新聞記事　・・・　ｐ３５

この通信について

この「ゆにーく your らいふ・落合勇平追悼特別号」は、今年の３月１９日に亡くなった自立生活センター・小平の職員、落合勇平さんに関わった職員（当事者、健常者）、ヘルパーの皆さんの、落合さんへの追悼メッセージを集めたものです。

メッセージを書いて頂いた皆さんの気持ちをそのままお伝えしたいため、頂いた原稿をそのまま掲載しています。また、原稿は、お名前順（五十音順）に掲載しました。

皆さんの落合さんへの想いと、落合さんの残した足跡が、これを読む方に少しでも伝わることを、編集委員一同願っております。

平成２５年６月２６日

「ゆにーく your らいふ」編集委員一同

落合勇平　年表

１９８１年　５月１２日	青森県三沢市に生まれる
１９８７年　４月	三沢市立木崎野小学校入学
８月	埼玉県入間市立扇小学校に転校
１９９３年　４月	入間市立向原中学校入学
１９９６年　４月	埼玉県立豊岡高校入学
２０００年　４月	立教大学入学 在学中より自立生活センターの活動に関わる
２００４年　３月	東京都Ａ区にてアパートを借り、自立生活を始める
２００５年　９月	所属団体を「自立生活センター・小平」に移し、主にピアカウンセリング、交通アクセス運動、ヘルパー研修講師等の活動を行う
１０月	埼玉県内の病院に入院する。入院中の介助について行政と交渉を行い、１日１０時間の介助保障を勝ち取る
１１月	東京都Ｂ市に転居。行政との交渉により１日２４時間の介助保障を勝ち取る この頃よりマウスピース型人工呼吸器を使用
２００６年	路線バスから乗車拒否を受ける。これをきっかけにバス会社との交渉を行い、乗務員研修や接遇マニュアル作成に主導的に関わる
２００８年　１月	気胸の悪化により入院。Ｂ市との粘り強い交渉により、入院中の１日２４時間の介助保障を勝ち取る。 この頃より鼻マスク型人工呼吸器を使用
２００９年　３月	人工呼吸器ユーザーの当事者団体「呼ネット（こねっと）」に立ち上げから関わり、人工呼吸器を利用する当事者の自立生活についての啓発活動、人工呼吸器ユーザーでも当たり前に暮らせる社会作りのための運動を行う
２０１０年　６月	気管切開手術を行う
２０１１年１０月	この頃より入退院を繰り返すようになる。ピアカウンセリング、自立生活プログラム、「呼ネット」の活動を継続
２０１３年　３月１９日	循環器不全により永眠。享年３１歳

追悼メッセージ

落合さんのご両親ご親戚の方々には謹んでお悔やみ申し上げます。

私が落合さんと最初にお会いしたのは２００５年、ＣＩＬ・小平の支援を受けての自立の２年ほど前になります。都内の自立生活センターの代表の方から「相談に乗ってあげてほしい人がいるんだけど」と言われ、彼が事務所に来たことが知り合うきっかけでした。都内の代表が男性だったので、相談に来るのはてっきり女性の障害を持った方だと思い込んでいたところ、あらわれたのが若い男性だったのでびっくりしました。

相談に来た落合さんは親との関係の取り方に悩んでいました（親との関係については落合さん自身がＣＩＬ・小平の機関誌の中で書いています）。私がその時にお話ししたことは、落合さんもこれまで親の介助を受けて生活することや、障害を抱えながら社会で生きていくことは大変だったと思う。でも、同じように親にも障害を持った子供を育てる苦労があった。周囲からの差別も受け、大変な思いをしながら生きてきた背景がある。あなただけが大変な思いをしてきたわけじゃないんだよと、そういう風に話をしたことを思い出します。

その後、彼は勉強のためにＣＩＬ・小平に週１回通わせてもらえないかと言ってきて、自立生活プログラムを受けたり、会議に参加したり、１年半ほどとても熱心に勉強を続け、やがてＣＩＬ・小平で働きたいと希望するようになり、職員として働き始めました。

その当時の落合さんの印象として、繊細で理知的な人で、さわやかな笑顔を人に見せるところが魅力的だと感じていました。また若い当事者職員が入ってきてくれたということが非常にうれしかったことを思い出します。

落合さんとの思い出はたくさんありますが、話がつきませんのでここまでにし、彼の活動の成果であり生きてきた証、彼がこの社会と後の世代に残したものを紹介します。

まず、複数の自治体において数年にも渡り、時には市役所に泊まり込みまでして勝ち取った入院時のヘルパー派遣制度の確立。そして人工呼吸器ユーザーネットワーク（呼ネット）の設立に携わったこと。これらの意味はとても大きなものです。また、厚労省職員が障害を持って地域で生きる方の生活を知るための見学を何度も受け入れ、呼吸器利用者の在宅生活における問題提起に大きな役割を果てしてくれました。

ＣＩＬ・小平としても、人工呼吸器を利用しながら地域で生きるための支援

のノウハウ、医療との連携とそれによって得られた知識と経験、人工呼吸器の扱いや吸引等の高度な介護技術など、落合さんとの関わりの中でとてもたくさんのものを学ばせてもらいました。

そして、落合さんと出会い、ご両親ご兄弟や友達の方々と知り合い、共に生きられたことが何よりの喜びでした。

自立生活センター・小平　代表・担当ＧＭ　川元恭子

落合君へ

落合君と初めて会ったのは、お互い研修で来ていた日本青年館でした。

これから宜しくお願いしますとお互いに挨拶をした時、落合君が緊張した顔をしていたのを今でもよく覚えています。あれから約９年も経ったこと全然実感が湧きません。そして今、落合君が、ここにいないということ、正直まだ受け入れられていない自分もいます。

一緒に家探しから始まり、何度も何度も通った病院や行政との交渉、自分が夜勤に入った時には、特に色んな話しをしたよなぁ、落合君が常に先の体の不安と戦っているということを初めて聞いたときには、自分は大丈夫としか言葉が出せなかった。それから自分は事あるごとに何か落合君が不安がって相談してくると最後には大丈夫、大丈夫と軽く答えていて、ある日、小野田さんの大丈夫は全然あてにならない！本気で考えてほしい！と怒られたときがあったね。その時は、自分なりに考えがあっての大丈夫だったけど、さすがにそう思われてもしょうがないと思い反省しました。それから落合君から相談された時は、あまり大丈夫って答えないようにしていたけど、入院中に俺、本当に大丈夫かな？大丈夫って言ってよと二人でいるときによく言われた。さすがにあれは、今でもふと思い出すとグッときます。先を悩んでもしょうがない、今、何かをする事が先につながっていくと言って偉そうに落合君に話したときには、そう思う、簡単に大丈夫って言ってた訳ではなかったんだねと言ってくれた。自分は、言葉で説明するのが、うまくないから、そういった意味では不安や苦労をたくさん与えてしまったと思う。ごめん。でもそんな俺に最後まで付き合ってくれた。本当にありがとう。

最後に落合君は、自分と同じ障害を持った特に自分より若い世代のサポートを行いたいとずっと言っていた。実際それだけは、どんなに自分の体調が悪くても本気でやっていた姿を何度も見ていました。だから自分なりにだけどその意思を引き継いでいきたいと思います。自分に何が出来るか落合君みたくは、出来ないけれど自分なりに何かやっていきたいと思います。

担当コーディネーター　小野田貴光

落合さんとの思い出

私が初めてILPで障がい者運動の歴史のリーダーをする時に練習に付き合ってくれました。
真剣に聴いてくれて、アドバイスしてくれました。

仲間で話している時の顔、美味しいものを食べた時の顔、色んな可愛い顔を思い出します。

オッチーが築いてくれたピアカンやILPなど、
沢山の障がいを持つ仲間に伝えていきます。

可愛い顔で見守ってください。

浅川 都

おっちーへ
今はゆっくり寝れていますか。おっちーとは入れ替わりのように私は小平に来たよね。おっちーのデスクを共有させてもらったり、おっちーのやっていたことを少しずつやらせてもらうようになったり。その度に色々聞いたり、愚痴ったりもしたね。でも、いつも,真面目聞いてくれたり聞いてくれなかったり(笑)私がILPで歴史の部分を担当する時におっちーに資料をもらったり聞いたりしてやったよね。おっちーの資料はすごく細かくて、たくさん調べてあってとても参考になりました。とってもおっちーらしい資料だったね。同じようにはできなかったけど、自分なりに色々知ることもできたし、本当にいい経験になりました。ありがとう。障害者センターのピアカンでも行くと必ずおっちーの名前が出て、おっちーの存在がすごく大きいんだなって実感します。すごいね。
唯一私がCIL・小平で行けた研修旅行におっちーも行けて本当によかったなって思います。そこでたくさん話せた気がするね。都ちゃんがおっちーと私の会話を聞いていて「兄弟みたい」って言ってくれたけど、なんかお兄ちゃんみたいな感じだったかもね。
病院の中で会うことの方が多かったけど、お正月、ビンゴとかゲームとかして遊んだの覚えてる？おっちーの顔に落書きしたりデコピンしたのすっごくおもしろかったね。今でも写メ見て笑えるよ。他にもたくさん病院で楽しいことあったね。その度におっちーは嫌がっていたけどね。後半は病室に行っても会えないことやあまり話せないこともあったけど、おっちーが「生きる」っていうことを教えてくれていたような気がします。
たくさんの人に支えられて自分の意思を貫いたおっちーを見て、こんな風に生きたいって思ったよ。それってきっとおっちーだったからだよね。私は名古屋に帰るけど、名古屋でもこんなに人に深く関われるような組織を作っていきたいなってすごく思ったよ。本当におっちーに出会えてよかった。たくさんのことを教えてくれてありがとう。またね。

（内海千恵子）

落合くんとは７年間、共に仕事をしてきましたが、実質、一緒に関わったのは３年ぐらいでした。

１番思い出に残っているのは、ある夜、いきなり電話で「今からボーリングやらない？」と、深夜まで遊んだことです。あと本当に落合くんが入退院を繰り返してお見舞いに何回か行った際、私に対して悪たれ口をたたいては笑わせてくれていました。そんな落合くんとも、もう会うことが出来ず寂しいです。

落合くん、天国で私達の頑張りを見守って下さいね。

（大渕由理子）

落合くんと初めて会ったのは確か９年前だったかと思います。板橋で自立していたころからのお付き合いなので。第一印象は気さくで人懐っこくとても付き合いやすい感じでした。初めてカラオケに一緒に（野郎二人で）行った時に“なんてしぶい歌を唄うんだろう”と思ったのを今でも覚えています。

その後もオッチー（多分そう呼び始めたのは自分かと）と過ごす時間を重ねるうちに、彼の“へ〇レ”っぷりを知る機会も多く、 恐いのや痛いのは人一倍嫌い、罰ゲームは逃げるなど思い出すだけでも数々です（笑）。ただ、そういうキャラクターがみんなに愛されていたのかなと思います。

でも、そんなオッチーもここぞと言うときには熱いものを発揮して一緒に戦ったのを覚えています。一番印象に残っているのは某役所に真夜中までいたことです。あの時の役所職員の困った顔は印象深く“さすがオッチー良く言った”と思ったくらいです。

オッチーの武勇伝はまだまだたくさんあり、もっともっと一緒に仕事がしたかったです…。今回のことはとても残念ですが、安らかに眠ってほしいと思います。いままでありがとう…。　（小泉信治）

落合くんを偲んで

今でも事務所第2会議室で満面の笑みで私たちを見つめている写真を前に落合くんが亡くなってもう四十九日を過ぎたんだと感慨深いものがあります。

彼が残して来たこと

ピア・カウンセリング好きの彼でした。
同じ障害を持つ人たちに自分の気持ちを開放できるピア・カウンセリングを広めたいという思いが小平市障害者センターのピア・カウンセリングにつながって今に至っています。
通勤に使うバスの乗車拒否から発展して交通行動をひっぱってくれました。
必要は感じていても日々の忙しさの中であとまわしになっていたことが今やらなければという気持ちにさせていったのも今思えば彼の存在があったと思います。
担当GMとして短かい時間でしたが介助者との関係のとり方を考えさせられたり、医療のことを沢山学ばせてもらいました。
それと葬儀の全般まで彼が生きてきた軌跡全て勉強になりました。本当にありがとう。
落合くんと出会って学んだ全てのことをこれからの自立生活センターに生かしていくので空の上から見ていて下さい。

竹島けい子

落合さん追悼

落合さんお疲れ様でした。
あまりお話しすることはできなかったけれど、鉄道交渉やいろいろ、特にベンチレターの会合は力をいれていた様ですね。
いつもニコニコしていていい青年でした。
長い間、病と闘い頑張りましたね。
大変だったと思います。
有りがとうございました。

中山喜美子

落合君が亡くなって何日過ぎたろうか。何日の何時に亡くなったなんて覚えなければならない？そんなことを考えていた５月９日初夏の陽気。落合君が好きだった気温。好きだった空。

今私の目の前にいたらきっとこう言っただろう『山嵜さん、今日の空きれいだと思いませんか？』

そういう会話は弾む。私と落合君は結構ロマンチストだから。自然からなる美しいものが好きで、詩が好きで、本が好きで。人前にでるのが苦手で、話すのも苦手で、一人が好きで、自信がもてなくて・・・。上げればきりがないくらい似ているところがある。ただ、よく喧嘩した。何度もした。口もきかなかったし、電話も出ないし、それから無視した。今考えたらお互い子供の喧嘩だった。

だって喧嘩の全ては落合君が悪い。いっつも私をケナス。ブスって言う。大体がその一言が原因。

でも今となってはどれも思い出だ。死んだという事実を受けとめるしかないとわかっていても私にはまだ難しい。

入院してからは死についての話をよく聞かされた。そのくらい死に怯えていた。それでも生きて、退院して、また入院して、結局何度苦しみを乗り越えたか。本当に頑張った。昨年からの最後の入院は良く耐えたと思う。結局落合勇平という男は強いんだよと何度も言った。でも本当に自信のない男で、何を言っても慰めにはならなった。だからもう褒めるのをやめた。その代わりに一緒に泣いた。それが良かったのか、私の話は良く聞くようになった。そしたら良く呼び出された。理由は『死ぬのが怖い』だ。そして話を聞きに病院に通った。怖くないよと言い聞かせ、まだ死なないんじゃない？というとりあえずの結論に達し帰る。週２、３回逢いに行っていたかな・・・。同じ話で。『今日は話題を変えない？』と言ってもガンとして変えない。それが落合勇平の性格だ。納得するまで変えない。忘れない。忘れようと気持ちをすり替えても、変な時に思い出されてしまう。数年前のことも突然言われる。『山嵜さんのあの時の一言傷ついていた・・・』『はい。ごめんなさい。』でも『本当にわかってるの？』としつこい。

これが私達の常だった。しかし体調に波があることが多くなり、会話ができないことが増えてきた。そんな時は元気な時みたいにブスとか、憎まれ口をたたかれていた方がどれだけ良いかと思ったものだ。意識がはっきりしている時

はとにかく死を恐れた。そして決まってこう言った『山嵜さん、僕の心臓が止まった時は傍にいて手を握っててよ。絶対だよ。』と。それに従うと何度約束させられたかわからない。辛かった。死を迎える大切な人の傍にいるのはかなり辛かった。それでも傍に居たかった。死についての話をすることで落合君の心が少しでも穏やかになるのなら何でもしようと決めていた。CIL小平と関わってから相手の気持ちに沿うことを知ったからだ。その代わり私の辛さを誰かが聞いてくれた。そうやって皆で落合君を支えた。落合君にとって死が怖いものでないように。死の３週間くらい前から目が覚めると『大丈夫？』と聞いてきた。傍に居る介助者に、職員に、私に。自分がまだ生きているかとの確認だった。そしてその後はこうだ。『山嵜さん、いつもありがとうね。』と。介助者にも傍に居る者にも同じように言った。そしてまた目を閉じて眠った。今迄そんな事は言ったことはなかったのに。それからまもなく心臓が止った。だから私も、駆けつけた者皆で落合君の名前を呼び手を握り身体を摩った。皆必死にそうした。そしたら落合君の口が動いた。『お母さんありがとう』と。その一言を遺して落合勇平は逝った。

結局のところ誰よりも優しい男だった。怖がりで意気地のないところもあったけど、誰よりも愛に溢れていたかもしれない。そんなアンバランスな落合勇平は生きていた頃よりも逝ってからの方が何かに付け笑いのネタになっている。そんな会話が耳に入ると落合君に触れたくなる。周りは何も変わらないのに、落合君だけがいない。その現実に慣れるまではまだまだ時間が掛かる。

PS：落合君、今どこにいますか？

（山嵜涼子）

僕は、落合さんの声を聞いたことがありません。一番最初の落合さんの印象は、腕に絵が描かれていて、その・・・ちょっと怖い人なのかなぁというものでした。介助者としての経験も浅く、病室での介助ということもあり緊張していたのを覚えています。そんな僕でも落合さんの容態が良くないことはすぐに理解できました。それでもコーディネーターの方と落合さんが親身に指導してくださったおかげで落合さんに必要な介助を覚えていくことができました。落合さんは介助の合間に「大丈夫？ゴメンね」と時折僕に言いました。あまりにも「ゴメンね」と言ってくれるから、もしかしたら介助させて申し訳ないと思ってるのかもと考えました。「ゴメンね。」と言われることが僕はどこか悲しくて、本当は僕がもっと必死になるべきなのに、生死の狭間で頑張っているこの人になんでこんなに気を遣わせてしまっているんだろうと思いました。このままではいけないと思い、落合さんに『一年後には照れくさくなると思うから今言いますけど、落合さんいつもゴメンとか大丈夫？とか言ってくれますけど、申し訳ないとか思わんといて下さいよ。貴重な体験させてもらってありがたいんです落合さんがいる意味は僕にはかなり大きいんです。だから気を遣わないで下さいよ。』と話かけました。落合さんは目をつぶって涙をこらえた様に「ありがとう」と二回言ってくれました。その時僕は、この人の為にできる限りの手助けをさせてもらおうと心から思いました。するとその日から、落合さんとの関係が少しずつ変わっていきました。必要な介助をこなしていただけの関係からいろんな話をするようになりましたマーボー豆腐をいつか作る約束もしたし、お母さんが作ってくれた手巻き寿司を一緒に食べたり、ＷＢＣの中継でアナウンサーが伝えきれないものを僕が実況して応援したりもしました。落合さんの声は最後まで聞くことはできなかったけど声が聞こえなかったからこそ、落合さんの気持ちを深く理解しようと思うことができました。

介助の仕事を始めて半年が経ち、僕にも少し心境の変化がありました。僕は将来介助とは別にやりたい事あったのですが、それとは別に将来障害持たれている方の就職の支援ができる会社は作れないかとも思うようにもなりました。落合さんと過ごした五ヶ月間のように他の利用者さんとも真っ直ぐ向き合っていきたいと思います。
追悼のメッセージの結びに、ベッドの横で毎日にのように落合さんに話しかけていた言葉を天国の落合さんにも送りたいと思います。

落合さん、僕はここにいますから、ゆっくりやすんでください

上野　修

落合さんへ

介助者として、友として、落合さんと出会い、一緒に過ごした時間は私の宝物となりました。
たわいの無い話から、人生の話、宗教の話、宇宙の話などたくさん話したよね。共に笑い、共に泣き、共に悩めたことなど、本当にたくさんのことを共有できたこと、今でも心の真ん中に残っています。心から感謝です。

また、落合さんを通して多くのことを知り、自分の器を整えられました。これからわたしが牧師として立っていくとき、落合さんとの時間が、本当にかけがえのない財産になっていくと確信しています。ありがとうございました。
これからも介助者として、落合さんが戦っていった人生を心に置いて、がんばっていきます。どうか天国で見ていてください。

枝松　律

いなくなって初めて、落合さんの存在の大きさに気づく。
いなくなって初めて気づいたことがある。
落合さんに「ありがとう」や「感謝しています」といえていない自分に。
人とんが親しくなりすぎると言えなくなるステキな言葉たちを僕は落合さんに言えなかったことに「今」気づく。
だから、この場を借りてこれだけは言わせて下さい。
右も左もわからない、介護の世界に入り3年間、ここまで僕を育ててくれた落合さんに心から感謝しています。
そして落合さんにまたどこかで会った時に
「よくここまで成長したなあ」
と言われるような介助者になることが、今の目標です。

（大原伸公）

落合さん追悼号に寄せて

落合さんとは介助で約4年半の付合いになりました。
訃報が届いた瞬間は、悲しみよりも先に「ああ…本当にご苦労様でした」
という労いの気持ちが先に立ったのを覚えています。

落合さんは宇宙に関心を持っていて、たまに深夜二人で語り合ったものです。
宇宙の悠々の流れの前に、人の一生は星の一瞬きにも満たない、本当に儚いもの。
そんな事をぼんやりと考えていると、「オッチーくんも宇宙に還ったんだなぁ…」
と、夢想してしまう今日このごろ、でしょうか。

それでは落合さん、さようなら！　そしてまた会う日まで！

岡部 敏郎

今にも呼出音が鳴り、胸押しの指示が聞こえてきそうなぐらい、まだ実感がわかない今日この頃です。

落合さんの著書の中で、「勇平メモ・いつも感謝していること」の中の一つで「シークレットに出会えたこと」とありますが、このシークレットによって落合さんとの距離がグッと縮まったことを今でも思い出し、ニヤニヤしながらこれを書いています。
正直、落合さんとの思い出はこのシークレットが大半を占めているような気がします（笑）。そんな落合さんが僕は好きでした。

亡くなる数ヶ月前からは、あまりの苦しさで、死にたくないけど生きたくない、というような落合さんを目の当たりにし、僕自身もとても辛かったです。そんな時でも落合さんは、僕の小さな励ましの言葉でも、落合さんは大きな安堵の中、笑顔で頷いてくれました。
とても嬉しかったし、なんだか逆に励まされたことを思い出します。

惰性で生きてきた僕に、落合さんとの出会いで、生きること、死ぬことを深く考えさせられました。とても感謝しています。「ありがとう」
そして、いつも落合さんを暖かい優しさで包み込んでいたお母さん。その暖かさに僕もいつしか癒されていました（笑）。ありがとうございました。
またどこかでお会いできる日を楽しみにしています。

（小濱大輔）

僕が初めて関わった利用者さんが落合さんでした。
始めは研修でしたが、その後枠に入って、三年半ぐらいの時間を過ごしました。
朝までゲームをしたり、ラーメン屋になべ持っていったり、立てなくなるまで頑張ったり、色々な経験をさせてもらった現場でした。
これから他の利用者さんに関わっていく上で
この三年半のことを糧に、落合さんの分もやっていきたいと思います。

小林　和也

落合さんの介助に入ったのは5年前になります。
歳がひとつ違いという事もあったのか、出会った当初から話題が共通していました。少年期に観ていたTVや映画の、それも出演者の台詞まわしや仕草など細かい話で盛り上る為、ただ単にお互いヘンに記憶力がいいだけでなく、感覚的に近かったんだと思います。お陰で僕もゆとりを持ってお付き合いさせて頂きました。
しかしここぞという時は「利用者と介助者」という関係性にシビアに立ち返れる実直さや、人と違っても自分の直感や行動を信じる主体性は落合さんの輝く魅力と感じております。
あれからひと月半が経ちようやく出版に至った詩集を読んでいると、やはり現実を受け入れ難く辛くなります。
自分もまだまだ何かやれたと悔しくなることもありますが、落合さんと関われた5年間を大切に致します。

清水　修

天国にいる落合さんへ

こんにちは!! 高崎です。今、落合さんは何をしているのでしょうか？
やっと落ち着いて大好きなお寿司を何も気にせず食べているのかな？
それともラーメン？(笑) どっちにしろ苦しい気持ちから開放されて自由気ままに
過ごしていますよね!!
僕は昨年の8月下旬から落合さんの介助に入らせていただきました。会った時
から病院で最後までずっと病院での介助になりました。そして、出会ったその日に2
時間ほど会話をして、その日以降体調を崩してしまい3月までの8ヶ月間、ほとんど
落合さんの声を聞けず、会話もできず、お別れの日を迎えてしまいました。落合さんか
らすると、ろくにコミュニケーションを取っていない人に介助されるのはとても不安でしたでしょうし、
僕も不安でした。もし願いが叶うのであればもう一度、沢山会話をして介助に入
りたいです。変な文章になってしまいましたが天国でお元気にしていて下さい。　高崎裕樹

落合さんの介助にはちょうど5年ぐらい入ってました。
色々思い出などありますが、最後の入院の時とかはしょうじき大変なことが多かったですが、落合さん本人から「いつもありがとう」っていってくれたりして、そういう時はうれしかったです。
大変な利用者ではありましたが今はいい経験させてもらったと思ってます。自分が~~入って~~介助に入っていた利用者がいなくなるのはもちろん初めてのことでしたが、想像していたよりショックがでかかったです。落合さんも苦しかったり辛かったりすることがずっと続いていたのでゆっくり休んでもらいたいと思います。

（藤延亮平）

落合君の怖がりのくせに、何かを決断する時の思い切りの良さが好きでした。
まだ元気だった頃の意地っ張りで負けん気の強い落合君と、
いろんな所へ遊びに行ったのはとても楽しかったです。
沢山の無茶で楽しい思い出をありがとう。

（前島史和）

繊細と大雑把、言葉にこだわる、こだわらない。
他にもあったと思うが、とにかく合わない部分が多かった。
当然、喧嘩になるが決着つかず。唯一、頑固なところだけは似ていたのかも知れない。

人は二度死ぬと言う。一つは肉体が活動を停止した時。
もう一つは死んで後、その存在を忘れられた時。

きっと忘れないと思う。良いことも悪いことも全部ひっくるめて。
この三年余りのことは、僕の記憶に残っていくんだと思う。

八鍬健之介

オッチーへ

退院して元気になったら一緒にやろうね！って約束した
『CIL・小平クリエイター部門』
その約束は叶わなかったけど
これからも笑いと感動の映像作品を創っていくから
君も天国で素晴らしいアイデアを考えてね

もう一度好きなものを食べられるようになったら
また病室でラーメン作ってあげるね！
って言った約束は叶わなかったけど
『CIL・小平くろくまラーメン食堂』は
これからもラーメンを作り続けていくから
君も天国で美味しく味わってね

元気になって自宅に帰って仕事できるようになったら
呼吸器利用の障がい者のために運動がしたいんだ
って言った君の想いは叶わなかったけど
『落合勇平の想いを受け継ぐ者たち』
の１人として俺も頑張っていくから
君は天国でゆっくり休んでね

新井　智

おっちーへ。

おっちーが残した本の言葉をたどりながら、色々と思うことがありました。こんな風に感じていたんだ、と、知らないこともたくさんありました。

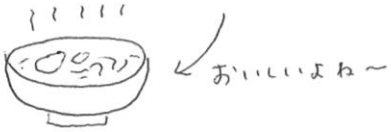
おっちーの心の中を少しだけ見られた気がして、うれしかったのもそうですが、もっとおっちーと話をして、じかにやりとりをして聞けたらよかったなあ‥と、悔いも残りました。

最後に病室を訪ねたとき、もう声をかけても返ってくるものがなく、そのときにもやはり同じことを思いました。

こういうことは、その人とのつながりがなくなって初めて気付くことなのかもしれないけど・・そんな思いが残っています。

この何年間かは、とても長くしんどい時間を過ごしたことと思います。その中で生き抜こうと戦った日々は、私の想像をはるかに超えたものです。本当にお疲れ様でした。

最後に。おっちーの大好きだった「魚らん坂」のラーメンは、今度もひき続き定期的に私が通うから、どうぞ安心してね！



岡村　千重子

おっちー

おっちーとは同じ歳でした。学年は1コ下だったけど……。
初めて会ったのは、おっちーがまだ小平に来る前で、
当事者スタッフの家で飲み会があった時に、おっちーも
遊びに来ていて、その時はあまり話さなかったけど、
こっちで自立してからは、ディズニーランドでダブルデート♡したり、
皆で小金井公園でバーベキューをしたり…。バーベキューの時に、
ロケット花火が私の顔に当たり、「嫁にもらわなきゃ…」と
言ってたのを、今でも覚えています(笑)
たくさん、たくさん思い出があります。
おっちーの事は、絶対忘れないし、これからも小平の仲間だし、
会えないのは、とてもサミシイけど、おっちーの分まで、皆で
がんばっていくから。　おっちーもむこうでがんばって!!!

岸本 真奈実

心優しいオッチーへ

栗田徒司

オッチー！突然のお別れからあっという間に2ヶ月が過ぎようとしていますが、そちらはどんなですか？
オッチーが小金井に来てすぐくらいに（たまたま僕が介助に入らせてもらっている時に）自宅のすぐ近くで後ろ足を片足切断した猫を見つけたよね。その時の事がとても印象的だったので思い出しながら書いてみます。

その猫は事故後間もない感じで、足の半分以上がなくなっているその切断部は、血や体液でぐちょぐちょしていたけど、少し暑い季節だったのもあり、そのまま放っておくと炎症が進んで死んじゃうかも知れないと話をするやいなや、病院に連れて行こうとオッチーが決断し、オッチー宅の自転車の前カゴに段ボールを入れて（これが心憎い）、その中にやさしく猫を入れて、近くの動物病院まで急いで行ったよね。オッチーが事情を話すと、その獣医さんは、飼い主もわからないしいないって）その猫を受け入れてくれ、しかも治療費も入院代も全て無料で傷口が完治するまで預ってくれたね。その対応には本当に驚いたよ！オッチーが持っている人徳なんだなぁと思いました。

人も動物も差別する事なく命あるものを大切にするその行為は、権利擁護や障害運動にそのままつながるんだなぁと、今更ながら考えさせられます。これからは一緒に運動はできないけど、遠いオッチーの優しさが垣間見られただけでなく、空から見守っていて下さい！

「オッチーはおれのことをどう思っていたんだろう？」
この今では答えてもらえない問いが、３月１９日以来、頭の中でグルグル回っている。

思えばオッチーと楽しいことをしたという記憶がほとんどない。
例えば行政や病院との、長く厳しい交渉。偏見と無理解への怒り。役所への突撃、泊まり込み。そういう時にいつも一緒だった。
かと思えば、交渉のやり方をめぐって二人で大喧嘩して、しばらくマトモに口をきかなかったこともあった。

そんな思い出ばかり湧いてきて、お互いについて突っ込んだ話をした覚えもないから、一体自分がオッチーにとってどんな存在だったのかを知ることがなかった。

そんなとき、生前オッチーが自分について言っていたという言葉を人づてで聞いた。
びっくりすると同時に、涙が出た。
嬉しかった反面、そう感じさせてしまったことが果たして良かったのか、わからなくもあった。

だから尚更、生きているうちに聞いておけばよかった。「オッチー、おれのことどう思ってるの？」と。
さようなら、オッチー。

佐藤 草作

おっちーへ

高田　貴志

落合君との最初の印象強い出来事は、小平の仲間たちと小金井公園でやったBBQ。落合君に手持ち花火の火を脇腹にあてられ、脇腹を花火で焼かれたね。人間の肉が焼けたときの臭いを、生まれて初めて嗅ぎました。かなり臭く、そして痛かったです。そのときの落合君は、謝るよりも前に真っ先にその場から逃亡したよね（笑）

落合君が亡くなってから、もうしばらく経つのですね。落合君が死の淵を彷徨い入院を続けてから、嬉しい事、苦しい事、本当に色々なことがありました。尿が出ていなかったとき、少しずつ尿が出始めたときの喜び、死の淵から不死鳥のように何度も元気になって戻ってきてくれたこと。苦しかったことよりも、嬉しかったことばかり思い出します。

落合君の葬儀の際、今までの人生の中で葬儀であんなに泣いたことは初めてでした。あんなに泣いてしまったのは、落合君の入院中、今まで以上に落合君の強さ、弱さ、人間らしさに触れ、本当の意味で深く落合君と関われ、落合君も関わってくれたからなんだと思います。

落合君は、以前僕の脇腹が花火で焼かれたときに真っ先に逃亡したように気弱な部分があったり、やると決めたらすぐに実行したりできる行動力があったり、何かアンバランスというか人間らしいというか、そんな「落合君らしさ」が大好きでした。

落合君に出会えて本当に良かった。素敵な出会いをありがとう！！

オッチーへ

初日の時は妙に緊張していて色々と残念な感じになってしまって申し訳ない。今思えばよくあんな残念スタートだったのに急激にフレンドリーな感じになれたのが不思議でしょうがないけれど、やっくんの素敵なフォローもありつつお互いに分かり合えた成果かなと思っているよ。あのおいしくなかったカップラーメンはもうどこ探しても売ってない、、、。オッチーとはしょうもない話や恋話をよくして共感できたり地味に傷つけたりしたかもしれないね。あれこれと悩んでは「俺どうしたらいい？」とか「どう思う？」なんてことを言って意見を求めては「全然参考にならないよ～！」ってすごくめんどくさい感じだったけど、そんな人間らしい悩みを隠しきれずに出してしまうオッチーが案外好きだったのかな。ただ、最初の頃の女性の好みとズレが生じてきてからは共感できなかったなぁ～。他にも日々くだらないことばかり話していてあんまり覚えていないけどオッチーはどうだろう？真面目な話もするべきだったかな？

体調が次第に悪くなっていって、自分の死を見つめながらの病院生活が続いて、さらには会話すらまともにできなくなって。その時のオッチーの辛さや苦しさはどれだけのものだっただろう。その辛さや苦しさを全部分かってあげられなかったし、「大丈夫！がんばれ！」って声をかけることしかできなかった自分を今でも後悔しているよ。もっと分かってあげられたのに何故分かれなかったんだろう。もっとできたことはあったのに何故できなかったんだろう。もっとがまだたくさんあるけれど、次にそっちで会うときまでにはまとめて返せるように成長しておく！またくだらない話でもしよう！ゆっくり休んで待ってて！

徳増真明

オッチーへ

オッチーが事務所のスタッフになって、最初は全く話ができなくて、いつかみんなでBBQをやった頃から少しずつ話をするようになったよね。話っていっても、いつも私をバカにしていたような気もするけど…、こんなに早くいなくなっちゃうなんて思わなかったから、もっと色々な話をしてみたかったなあって思ってます。

ゆっくり休んで、また、夢の中で楽しいバカな話をしていこうね!!

中山恵実

自分が介助に入り始めたのは、落合さんが入院を余儀なくされた後のことでした。こちらの想像が及ばないほど心身ともに大変な時だったはずですが、新人である自分に対して、気持ちよく接してくれました。内心、「入ったばかりだし大丈夫かな」と、不安もあったと思います。でも、それを表情や言動になるべく出さないよう気を遣ってくれていたのだと思います。そんな落合さんに対して有難くもあり、申し訳ないような気持ちもあります。

死ぬ寸前までいきながらも何度も復活してみせる落合さんの生への執念は、その度に自分を勇気づけてくれました。そのことにお礼を言いたいです。本当にありがとうございました。

（永田大輔）

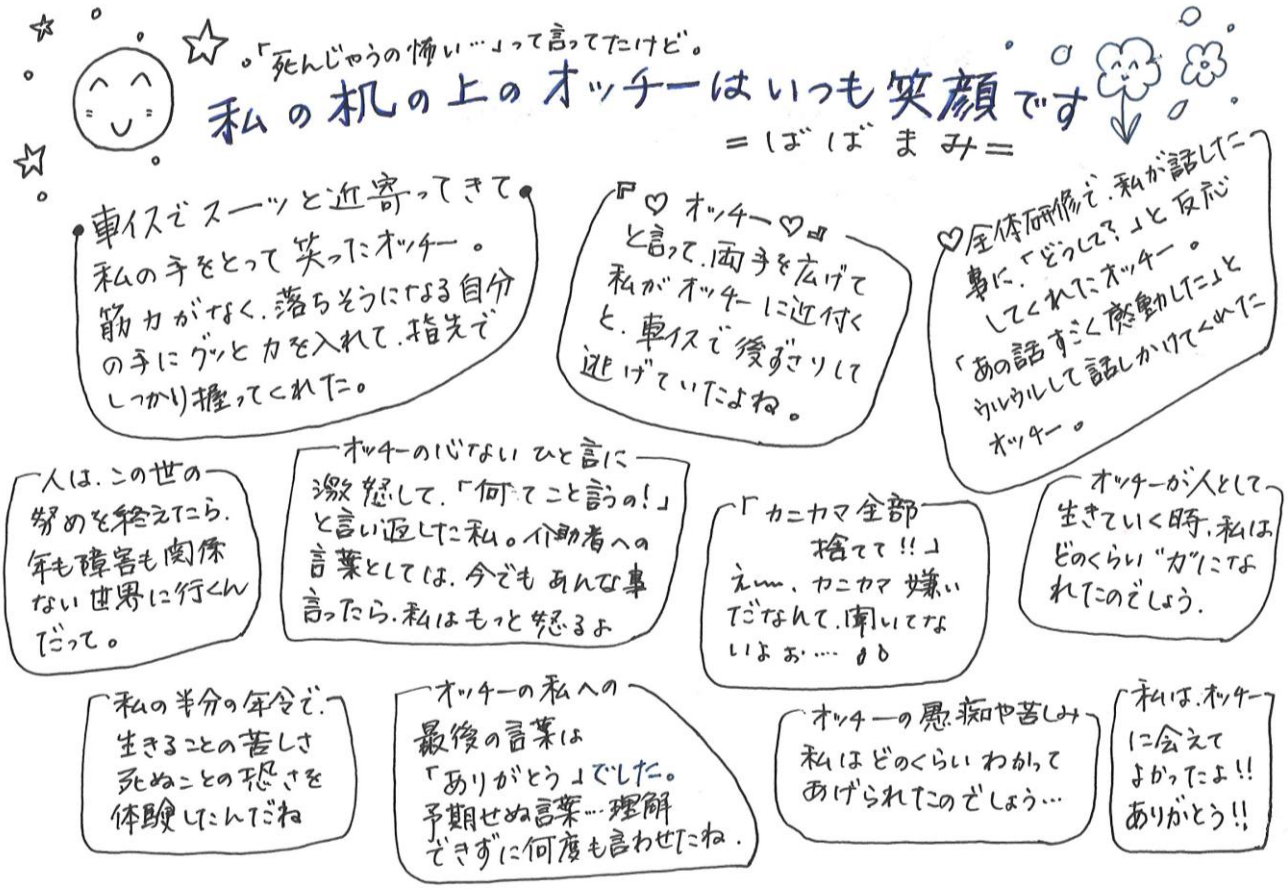
落合さんへ

私が職員になった年に出した年賀状に、「私は人見知りなので、話しかけてください。」と書いたら、「僕も人見知りなので、よろしくお願いします」と返ってきました。(笑) もっとたくさん話をしてみたかったです。本当に残念に思います。

落合さんのステキな笑顔は忘れません。

ゆっくり休んで下さい。

根本



研修の講師を落合さんがしていた時に、僕は受講者として参加していて、落合さんの話は、すごくきたなくて、嘘、偽りを感じなく、自然に入ってきました。

僕が、落合勇平という人間に興味をもった瞬間でした。

落合さんに興味をもったまま、なかなか接点が無く、話もほとんどしたこと無い中で、落合さんは体調不良から入院、人出を増やすため、僕が介助に入らせてもらえることになりました。落合さんは、体調不良から入院しているので、それどころでは無かっただろけど、僕は不謹慎かもしれないけど、ようやく関われる！そんなことを思いました。

そこから、約１年半関わらせてもらったけど、のち、半分くらいは、僕の見た目が怖いと、なかなか話もできませんでした。介助者としての距離まで来て、初めて見えた、落合さんの一面でした。もしかしたら、僕と落合さんは、よい関係を取れないのでは？そんなことも思いました。しかし、ある時一緒に見た映画の内容が怖く、たまらず「さすって…」と言われ、珍しいなぁと思いながら、さすっていました。改めて、興味深い人だなぁとか思いました。おそらく、そこから僕と落合さんとの関係は急成長しました。

くだらない話を沢山したり、ラーメン食べに行ったり、好きな女の話をしたり、お互いに辛い状況もあったけど、とにかく僕の、落合さんへの興味はつきず、話して笑って、知れば知るほど落合さんが好きでした。落合さんの話をもっと聞きたいと思ったし、僕の話の反応も見たいし、とにかくなんだか好きでした。亡くなってからも、あの時ああだったのかな？こうだったのかな？答えは見つかりませんが、ふと意味もなく考えています。

でも、やっぱり一番気になるのは、落合さんは、僕のこと好きだったかな？

そんなことを思ってみたり…そんなことを今でも考えさせてくれる落合さん、今でもずっと興味の尽きな気になる人ですよ！　ありがとう！　　松本　弘幸

オッチーへ

介助者として、コーディネーターとして、そして一人の人間としてオッチーと付き合ってきて、いろんな話をしてきたなぁ～。
話の内容は「人間関係の難しさについて」が多かったと思う。話の始まりはいつもオッチーから「相談があるんだけど…」
自分はまだまだ未熟者だし、偉そうなことなど到底言えないのに、いろんな相談をしてきてくれて本当はスゲー嬉しかったんだ。
話をしていくといつも最後は自分の話を聞いてくれていたオッチーがいたね…
今思い返せば自分自身が救われていたんだと分かった。(コーディネーターとしては失格かも…笑)

本当にありがとう。

自分もまだまだ話足りない事がたくさんあったけど、今回ばかりは仕方が無い、少し早かったと思うけど、今はゆっくり休んでください。
またいつかゆっくり話をしよう、その時はオッチーの話を最後までしっかり聞けるように成長しておくよ！！

ワイパー

落合くんが自分たちのいるこの世界から去り、遠くに行ってしまう。そう思ったとき、声が届かなくなってしまう前になにかを伝えたいと言葉を探したけれど、うまく見つけることができなかった。霊安室でも、お葬式でも、そして今も、どれだけ落合くんと彼をとりまく現実に向かい合ってもかけるべき言葉は見つからない。哀惜も、感謝も、どんな思いもぼんやりとしてしまう。そこにあったのは、いろんな場面と感情がとめどなく浮かんでは消えるという繰り返しだけだった。

いたずらっぽく笑う顔にとても愛嬌があった。
社会問題や哲学について議論している時間はとても楽しかった。
臆病で億劫な彼の姿に呆れもしたけど、時おり見せる思い切りのよさに尊敬もした。
恋愛観に関して多くを語り合ったが、共感することは少なかった。
人生に対するひたむきで真摯な姿に「生きる」ということのひとつの答えを見せられた。
そして今、仲間との長い長い別れについて教えてくれている。

たぶん、どれだけ繰り返しても最後にふさわしい言葉なんてのにはたどりつかない。だからいつまでもこんなふうに彼のいる情景を思い出し続ける。でも、それはそれでいいような気がしている。

宮下　勇一

時には利用者と介助者であり、または良き先輩後輩であり、兄貴みたいだったり、また時には友達のようでもありました。たくさんぶつかる事もありましたが、一緒にいて楽しい事の方が多かったです。たくさん色んな話をしました。ここでは書けない様な話ばかりですが(笑)

基本はアニキ面され、パシリみたいな事をさせられること多かったですが、文句ばっか言われたり、甘えられたり、逆に恥ずかしいくらい褒められたり、悩み事聞いてくれたり、色んな一面がありました。年月が経つにつれどんどん仲良くなって、色んなとこ遊びに行ったりもしました。

初めて入る店とかビビって、待ってるから先に偵察に行くよう言われたり、夜呼び出されて夜中までゲームの相手させられたり、借りてった DVD が面白くなくて文句言われたり、野球見に行ったら寒い寒い文句ばっか言って全然試合観なかったり、、、

自分の気持ちにすごく素直な人で、悪く言うとその気持ちにたくさん振り回されたりもしましたが、そんな人間味のあるところが一緒にいてすごく楽しかったし自分は好きでした。逆に自分もたくさん文句も言ったし、わがままを聞いてくれてとこもたくさんあって感謝しています。最初に出会った頃より、お互い成長したな～みたいな話もよくしたり、そんな話をしたくせに調子に乗ってお互い同じ失敗をしたり…ダメなとこが似ているとこもありました。

身体がキツくて、入退院を繰り返していて、苦しみの連鎖みたいなのにハマっていて、それでも生きる事を必死に考えていて、笑顔を見せてくれたこと忘れません。亡くなった事、信じられない気持ちも、ごめんねと思う気持ちもあり、淋しくもなりますが、彼の生き様を思い返し、それを自分の力にして彼の分も精一杯生きていきたいと思います。落合さん、ありがとう！！

室井　野州宏

ありがとうオッチー、さようならオッチー

オッチーとの旅の思い出を脳裏に浮かんだまま書きます。いろいろ出かけましたが全部は書ききれません。年月はあまり思い出せません。ごめんなさい。

最初の思い出は厚生労働省に行った帰り、リフトカー（ハイエース）に自分が運転で竹島さんとオッチーが乗っていた。料金所で障害者手帳を見せて割引を申し出た所、料金所のオッサンに車種を申請していないから割引できないと言われ、知らないと食い下がる自分。結局、正規の運賃を払う自分。車内はシーンとなっていた。後で、オッチーと笑い話のネタになっていた。

次に、２００７年６月２日チューリップのラストライヴを埼玉県和光市まで一緒に見に行った。オッチーとは初めての遠出、介助者が外で待機していた為、自分が介助しながら観覧。距離がちょっと、近づいたかな？

その後、富士山一周（電車で神奈川、静岡、山梨を巡る）ツアーで一度も富士山を見られず。更にＪＲ東日本、東海の駅員から屈辱的な態度を見せつけられる。

更にその後、北海道の旅に出る。行きの飛行機（ＡＮＡ）で車いすを壊され、朝早く出たのに初日の半分は修理で時間を取られる。オッチーが障害者手帳を忘れ、色々な所で「ホテルに忘れた」と嘘をつきながら割引をゲット。レンタカーのリフトカーからは残念ながらオッチーは景色が見えない。ススキノの楽しいお店に行ったが車いすが大きすぎてお断りされる。交通規制中（営業車以外の通行禁止）の函館山登山道路をリフトカーで登らせろと函館西警察署に乗り込み、通行証をゲット。帰りの飛行機（ＡＮＡ）では車いす破壊のお詫びか偶然か知らないが普通席を予約していたのにスーパーシート（特別席）になっていた。当日の搭乗案内では機種変更でスーパーシート予約者が溢れていたのに・・・。

更にその後、真夏に山梨の小淵沢に信玄を訪ねての旅に出る。ＪＲの２階建ての臨時列車、改札の駅員、ホームの駅員に車いす席がある車両を聞いたが分からず、待っていた場所がたまたま車いす席の車両だった。オッチーが小淵沢で買った高原弁当は半分以上がレタス。

更にその後、山梨へさくらんぼ狩りツアー。その時、オッチーは気切を閉じようか悩み中。一日中、眠たいと言い道中の半分は寝ていた。結局、さくらんぼ狩りの時間は寝ていたので狩れず。

そして、最後のお出かけは、去年の今頃かなぁ。武蔵村山のイオン向かいにあるラーメン屋さん「新選組」。どこにしようか、リフトカーで迷いながらたどり着いたが、どう見ても店が狭い。最悪、外でもいいから食べられるか聞いてみよう。聞いたら店からＯＫが出た。でも、店に入れた。最後にオッチーに言った。「今月は年金が出る月だよね～？おごって」潔いオッチー全員分（７人分くらい）出してくれた。でも、このラーメン屋に車いす使用者が入店する事例を東京都の街つくり条例の交渉で話をした。価値がある最後のお出かけだった。

（吉田尚教）

■田無タワー

オカンとボクと、時々、オトン

1

「おかんがおいらの服を買ってきた・・・」
「まっ、いいっか・・・」
という感じのことを生まれてから、自立生活を始めるほんの三年ほど前までしていた。どういうことかと言うと、普段着る服を自分で選ばずに母親まかせにしていたのです。ん～今思うと、ちょいっと恥ずかしいなあと思っておりますが・・・。自分で買うといっても年に２、３枚程度であとは母親まかせ。全ての服ではありませんが、持っている服のほとんどといっても良いくらい母チョイスでした。

なんとなくは自分の着る服くらい自分で選ばなくてはと思いつつ、いつまでも親まかせのまま。母親が服を買ってくる度に口では「買ってくんなって言ってんじゃん」と反抗してみるが、楽だし自分で買ってくるつもりはあまりなし。服に関しては、本当に無頓着でした。

自立生活を始めて二年くらいから、自分で買うようになった。ちょっとずつだけど買物を楽しむようになってきた。一番最初に買った物は、ハンティング帽だったと思う。帽子を被ろうなんて一度も考えたことがなかったけど、被ってみると「案外いいじゃん！！」と自画自賛。どこに行くにも、いつも被っていた記憶が・・・、よっぽど嬉しかったんだなあ。ブランドものにあまり興味がなかったので、まずはユニ〇ロ通いから。ここ一年くらいは某ブランドが好きになり、ブランド中毒、買物中毒の方々の気持ちが少しはわかるようになってきたかもしれません・・・。

お目当ての商品を店に行って買ってくるという感じで買物が趣味と言える人など信じられなかったが、買物はストレス解消になるのが納得でした。最近は母もさすがに服を買ってくることはなくなった。「もう本当に買って来なくていいから」・・・母と子がまた一歩自立した。反抗的に言ってしまったボク・・・、「・・・っそう」と呟くオカン。子供が親
から自立していくことは頼もしくもあり、寂しくもある。

（オカン、ありがとう）って照れくさくて、まだいえない・・・。

（２００７年１２月号）

2

このタイトルちょっとばかしわかりづらく、タイムリーではありませんが、このまま続けさせてもらいます。前号からの続きということですが、ここでは自立生活にいたるまでの親との関係や葛藤などなど書いていくつもりです。

前号では親元を離れて生活するまでは、普段着る物のほとんどが母チョイスでしたという話をしました。親元での生活を想い返してみますと、生活の大半が自分主体ではなかったと思います。普段学校にいる時や友達とどこかへ遊びに行く以外は、ほぼ家にいましたし、その間のほとんどが家族介護でした。家族介護が主な生活では、お互いの都合を融通しあいながら、生活を送らなければなりません。母が外出する用事があれば、父が介護をします。父もいなければ妹が家に残って介護をしなければなりません。父と妹がいなければ、母のための外出に私もついていかなければなりません。また逆に私のための外出に母もついていかなければなりません。私が小さかった頃までは、こういった生活はできていました。けれど、だんだんと自己が強くなっていく年頃になると、親と一緒にでかけるのが嫌になってきました。家族介護が中心の生活である以上、それは避けて通れませんでした。

避けて通れないとあきらめ我慢し続けていると、その生活が当たり前になってきていました。気持ちが内向的になって、なんでもあきらめ、周りとの関係に興味を失っていきました。そうなると自分が周囲からどう見られるか、自分はどう見られたいかなどどうでもよくなっていました。なんでもいいや・・・と、自分がどうしたいかと積極的に気持ちを表現することすら億劫でした。

そんな私が徐々に変わり始める・・・のはまた次号へ続きます。

（２００８年３月号）

3

私は今、月一回病院に行っています。家族の人と一緒に通院されている身体障害者の方をよく見かけます。家族の中でも、とりわけ母親らしき人と来ているのが多い気がします。自立生活を始めて、一人暮らしするようになった 4 年前くらいまでは、私も母と一緒に通院していました。病院に行くと、その頃のことを思い出します。

車で片道一時間ほどかかる病院へ月一回母と一緒に通院していた。いつも某ラジオ局の放送を聞きながら、また時に眠りながら、車中を過ごした。医師の診察後、入院した時に知り合った同じ障害を持った友人を見舞うというのがいつものコースでした。そして昼食は車中でお寿司を食べていました。時に母と大人気なく喧嘩しながら、通院したこともありました。当時は、いくつになっ

ても死ぬまで通院はこんな風景で続くのだろうなとなんとなく思っていました。

その当時は、なぜかそれはしょうがないことと思っていました。今思えば、障害者だから保護者と一緒にいる光景は普通なのだという考えがあったからだと思う。大人なんだからいつまでも甘えてないでは、健常者にあてはめることであっても、障害者にはその考えをあてはめなくてよいという風潮が世の中にあると思う。ここでいう甘えとは、診察中の先生とのやりとりを親まかせにするとか、自分の健康状態を自分で把握していないという意味です。当時その風潮に自分自身でも染まっていた。しょうがないことだとあきらめていた。

でも自分の人生を主体的に生きていくなら、親まかせはありえないと思う。自分の体のことを自分以外にまかせることは、主体的とは言えない。それでもしょうがないとあきらめていた当時は、自分の体を親まかせにしていた。そんな昔がなつかしいと思える今が来るとは、思ってもみなかった。

（２００８年６月号）

4

なんで『田無タワー　オカンとボクと、時々、オトン』というタイトルを選んだのか考えてみたら、親の存在がやっぱり今の自分の性格、ものの考え方、人間関係の作り方などの根本に影響を受けたからだろうと思う。

いい意味でも悪い意味でも影響を受けたと思う。この通信を読まれているかもしれない健常者、障害者に関わらず、子供の頃の親の存在は大きかったのではないでしょうか。トラウマが親のちょっとした言葉や行動で植え付けられてしまうというのを聞いたことがある。たとえば「近所の〇〇ちゃんはしっかりしているらしいわよ・・・（それに比べてあなたはというニュアンス）」なんていうことで劣等感が芽生えてしまう。

子供は大人の話を聞いていないようで結構聞いているもので、また感受性も非常に強い。皆さんの中でも親に言われて傷付いたことや今でもあれは許せないなと思っていることはありませんか。親に言われ、勇気付けられたことや安心したこともあるのですが、許せない言葉も行動も私にはあります。それが心のしこりとなって親との関係や親以外の人との関係に少なからず何らかの影響を受けている気がする。

そんなことを考えていたら、それに類する事柄が目に付くせいか最近読んだ本で今の私にぴったりの内容があった。ある女性の主人公が今現在抱えている人間関係のトラブルを解決していくという内容でした。そのトラブルは過去に親との間にあった経験でできたトラウマが原因となっているとして描かれていました。その女性は葛藤しながらも親に謝罪と感謝の気持ちを伝え、心のしこ

りを解かしていく。

実際はそんな単純なものではないでしょう。だけどちょっとやってみようかと思っている。今でも親と一緒に暮らしていたらこんな気持ちになれただろうかと感じる。自立生活を始めることで冷却期間というか一定の距離があったからこそではないかと思う。

（２００８年１０月号）

5

前号で、ある本を取り上げました。内容はある女性の主人公が今現在抱えている人間関係のトラブルを解決していくというもの。そのトラブルは過去に親との間にあった経験でできたトラウマが原因となっているとして描かれていました。そしてその女性は葛藤しながらも親に謝罪と感謝の気持ちを伝え、心のしこりを解かしていく。私もその女性のように親に謝罪と感謝の気持ちを伝えようと思っているというところで前号は締めくくった。

その顛末を書きたいと思う。前号の原稿を書いてから、親に会ったのは数回。やはりすぐには言えなかった。別れる間際に言おう、言おうと思っていたのにどうしても出てこない「ごめん」の一言。次に会ったら必ず言うつもりなのになかなか言えない。もし言えないまま、万が一にも親か自分のどっちかが死んだら二度と言えない一言なんだと思い直して、原稿を書いてから二回目でやっと言えた。「今までごめん。意固地な態度で接したこともあったね。」の言葉を言ったら、なんだか気持ちが軽くなった。素直に生きようって心底思った。

この世にいるかけがえない人とのつながりを許せないの気持ちで満たして過ごすよりも少しでも多くの時間を笑顔で過ごしたいと思う。

（２００８年１２月号）

6

地域の障害者センターで障害を持った利用者やその保護者の方に向けて、「じりつ」についての話をすることになった。「じりつ」の話といっても、親元から離れて生活をすることを前提とした「じりつ」の話ではありません。どちらかというと「自律」だろうと思う。たとえ親元であっても、「じりつ」した生活をすることができますよという話をしたいと思っている。

どういう話をするかセンターの職員の方と打ち合わせをしていく中で感じたことがある。それは「じりつ」というものは、障害者だけに課されたものではないということ。職員の方自身の話を聞いていると、親子関係における「じりつ」は健常者であっても、多かれ少なかれ、なんらかの変化をさせたいという

気持ちがあるのだなと感じた。「じりつ」した親子関係というものがどういうものかよくわからないが、誰しもが親子関係の中で葛藤するものを抱えている気がする。

親は子を選択できない、また子は親を選択できない。逃げられない人間関係の中で、いかに相手と接していくか。それは一生誰しもが課せられた宿題なのかもしれない。「じりつ」した親子関係をあまり実践できていませんが、こういう親子関係もありますよと話ができればと思う。

（２０１０年３月号）

7

今年の夏、僕は死にかけた。病院から生きたまま外に出ることは絶対ないなと病室の天井を仰ぎ見ながら本気で思っていた。心不全が原因だった。７月末から10月末まで丸々4ヶ月入院していた。

体調が悪い時は心拍数が 150 近くまで上がり、まるでベッドの上でいつも全力疾走しているようでした。心拍数が上がると寝ても立ってもいられなくなり(もちろん立てませんが)、モルヒネを打ってもらうほどだった。

介助者に胸郭を押してもらったり、足をさすってもらうと不思議と落ち着き、入院している間、ずっとさすってもらっていた。僕が眠りにつくまで、さすってくれた。介助者のおかげで生き延びることが出来た、この場をかりて本当に、本当に「どうもありがとう・・・」と言いたい。

さて、タイトルにあるオカンとオトンが入院中どうしていたか・・・。入院している間、実家から毎日片道１時間かけて見舞いに来てくれた。心配で心配でたまらなかったのだろう。オカンも僕の死を覚悟していたらしい。体がきつくなると精神まできつくなっていく。精神的にドン底まで落ちているときは、オカンに泣きついた。そして介助者とオカンと僕の３人で泣いた。

死ぬのは恐い。恐いけれども、今回の死ぬ思いをした入院で色んな面を見ることが出来た。人に対して心の底から感謝するということを学んだ。自分の力だけではどうしようもなく助けてもらいたい時、他人に対して、助けを求めてもいいのだということを。そして、自分が変われば周りも変わるということを学べた。

オカンとの関係でもちょっとした変化があった。オカンの兄つまり僕の叔父は、同じ筋ジストロフィーで２４歳の若さで亡くなっていた。叔父の存在はうすうす気付いていたけれど、母の口から直接伝えられたのは初めてだった。母は叔父とある約束をしていた。それは叔父が書いていた詩集をいつか出版してあげるという約束だった。母にとって、その約束を果たせなかったことが非常

に心残りであったようでした。叔父が亡くなったのが９月１０日で、孫が生まれたのが同じ日だった。偶然かもしれないが、これで叔父との約束が守られなかったことに対して、母のことを許したと思ったようでした。そのことも入院中初めて知った。

生き延びた僕にはやりたいことが２つ出来た。1つは私を支えてくれた人たちに報いるためにも、障害者運動に邁進するということ。もう１つは母と叔父の約束を叶えてあげること。在宅に戻り、１カ月以上が経った。在宅生活に体を慣らすと同時に、古い詩集の編集作業をしている。

詩集を読むと、４０年以上前の福祉制度が何も無かった時代に障害者はどんな思いをしながら生活していたかがよく伝わってくる。毎回涙を流しながらの編集作業を介助者と共にしています。生かされたこの命、最後まで燃えつくしたいと思う。

（２０１１年２月号）

8

前回、昨年入院したことを書きました。そして生死の境を彷徨いながら、周りの人にたくさん協力していただき、生還できました。

今回は、その入院中におかんからもらった手紙を載せたいと思います。

前略　勇平様

今、こころ(姉)のお産が始まり、病院の待ち合い室で書いています。

今日には、産まれようとしている新しい生命があれば、たった今、葬儀社の人が「〇〇家のベイビーですが、１３日の火葬をお願いします。」と、私の前で、電話をかけていました。

お母さんの職場でも、５ヶ月の胎児や、生後一日や、生後四ヶ月で産まれてもすぐ亡くなっている子供も沢山います。

普通に産まれても、自然に生きられない子供達です。いかに自然に産まれ、生きていられるか、奇跡なんだと思います。

一人一つの命は、とても尊いものだと、教えられます。

お母さんも、三人の生命を神様から授かり、それぞれが違う魂しいで、産まれて来てくれたと、思っています。

勇平は、病気の身体になってしまったけど、君は心までは病気じゃない。普通の一般の男の人よりずっと健康な精神と心を培って、生きていると思います。

健康な身体の人でも、親から自立出来ない人が沢山いる中で、君は完全なる自立を果たし、自分の人生を見つめて一人で生きている。

生きるということは、自分の改革であり、魂しいの成長をする、自分と社会環境の中での戦いでもあるのかもしれませんね。だから、どんな人でも、自分は自分らしく生きていけば、いいのだと思います。

そういう意味では、勇平は、いろいろな葛藤があり、大変な身体と共に、前向きに、生きていると思います。

その生きる姿は、人に与えて来たものは、沢山あります。お母さんもその一人です。君から教わったものは、ほかのお母さん方より、病気の分だけ余計に、教わっています。

勇平は、自分のことをどう思っているか、わからないけど、お母さんにとっては、私のところに産まれて来てくれたことに感謝しています。一度だってそのことに後悔したことはありません。

今でも、お母さんにしてくれたこと、私の自慢の息子です。離れて暮らし、私に楽をさせてくれていますが、一日足りとも、君を思わない日はありません。美味しい物を食べても、勇平にも食べさせてあげたいと思うし、痛いところ、かゆいところに、手をかけてやりたいし、身体の不自由なところにだけでも世話をしてやりたい。それが、家族にしか出来ない。この世で、せっかく家族にさせてもらえた者の役割ではないかと思うのですが・・・。

でも

君は君らしく生きて下さい。

この手紙は、平成二十年九月十日に書いたものです。（慶応義塾大学病院待ち合い室にて）

君に読んでもらえればと、まだ中途半端のようだけど、お母さんの気持ちは伝わると思います。

平成二十二年八月二十日

この手紙を病室で泣きながら読みました。「こんなおかんの元に産まれてこれて、本当によかった」そう思いました。母とこんな関係になれたのは、親元を離れた生活をしているからこそだと思います。なんの気負いも気兼ねもしがらみもない親子関係・・・。こんな関係をもたらしてくれた自立生活、死ぬまで続けたいと思う。

（２０１１年５月号）

※『田無タワー　オカンとボクと、時々、オトン』は、落合さんが「ゆにーく your らいふ」通信に連載していた記事です。

1977年12月3日　第3種郵便認可　毎月18回(1,2,3,5,6,7の日)発行　2013年7月4日発行　SSKP　増刊通巻第5440号

落合勇平をめぐる新聞記事

渡辺一史

書くって何だろう

人生を深いところで支えるもの　(上)

「なぜなぜ俺生きているのかな／悲しみ苦しいことばかり多すぎるのに」

先月、私が編集を手伝った一冊の詩集が、札幌の出版社から刊行された。

「宮村時男詩集―歩けなかった僕の足あと」（かりん舎）という。

編者は、東京に住む私の友人で、落合勇平という31歳の青年だ。勇平は3歳のとき筋ジストロフィーと診断され、9歳から車いす生活となった。しかし、進行する難病と闘いながら立教大学に進学し、22歳からは親元を離れ、24時間介助者のサポートを受けながら自立生活を送っていた。

難病で見えぬ将来

勇平と出会ったのは10年前のことだ。私は当時、筋ジス患者とボランティアの交流を描いた「こんな夜更けにバナナかよ」を刊行した直後で、たまたま立教大学のゲスト講師に招かれた際に、電動車いすで大学に通う当時3年生だった勇平と知り合った。

「あと何年生きられるかと思うと涙が出そうになる」

出会った当時の勇平は、いつも自分の病気について、将来について、思い詰めたような表情で話す、繊細そうな若者だった。しかし、まじめで思慮深く、礼儀正しい性格の勇平に、私は強くひかれた。

以来10年…。私が東京へ行った際には、彼のアパートに泊めてもらったり、勇平に彼女ができたときには一緒に食事をしたりもした。

「ぼくの伯父さんが書いた詩をね、詩集にできないかと思ってるんだけど」

勇平からそんな相談を受けたのは、一昨年、彼の家を訪れたときのことだった。

自立生活を始めた勇平は、会うたびごとにたくましくなっていったが、筋ジスの進行から、その前年には人工呼吸器を着けていた。そんな勇平から、その日、「伯父さんの詩」を見せられた。

伯父の作品に泣く

筋ジスは遺伝性の疾患である。そのため、勇平の母親の兄も同じ筋ジスで、40年も前に23歳の若さで亡くなっていた。その伯父・宮村時男さんが生前、ノートに書き遺した詩が200篇以上も出てきたのだという。勇平は、「伯父さんの詩を読んでいると、福祉制度が何もなかった時代に、障害者がどんな思いで生活していたかがよくわかって、泣けてくる」という。

「じゃあ伯父さんの詩だけじゃなく、今の勇平の生活も交えて、40年前と今を対比できるような本にすれば、もっと深みが増すんじゃないか」

私はそういって勇平自身のことも書くよう勧めた。しかし、やがて勇平からメールで原稿が送られてきたものの、「おいおい、こんな文章じゃ、さっぱり伝わらないぞ！」原稿に赤字を入れて何度も突き返した。〝鬼軍曹〟と恐れられるほど、私は勇平に対して、厳しかったと思う。

「ワタナベさん、落合くんがもう意識ないんですよ」

今年1月になって、共通の友人である深田耕一郎さんから、そんな連絡をもらった。

勇平は、昨年8月に体調を崩し、入院していた。11月に勇平を見舞った際には、詩集の刊行を急ごうと話し合ったものだったが、まだ完成には至っていなかった。私は急遽、深田さんと相談して未確定だった詩の選定を行い、あとがきを勇平の母・美香さんの談話をもとに書き起こした。

その後、勇平は、2月になると、一時意識を取り戻し、私が持って行ったゲラ（校正紙）を見て満足そうな表情を浮かべていたのだが―。自らのエッセイも併録したその詩集の完成を見ないまま、勇平は3月19日に世を去った。

「この白いページに／今日も書くのです／誰にも言えない心をノートに映すのです」

時男さんにとって、詩とは、絶望的な状況の中で、自分を見失わないための「心の友」であり、歩けない自分にとっての「足あと」だと書いている。結局のところ、人の生を深いところで支えるものとは何なのか。それが凝縮したかのような詩が胸を打つ。

時男さんと勇平、2人の「足あと」をこの世に残すことができた、と私は信じたい。

（わたなべ・かずふみ＝フリーライター）

◇

㊦は6月上旬に掲載します。

絶望的な状況の中　心の叫び詩に刻み　「足あと」世に残す

無心　宮村時男

なぜ
なぜ
俺　生きているのかな
悲しみ　苦しいことばかり
多すぎるのに
はかない生命の
足のない　不具な身には
友も　いない
楽しい青春も　ない

なぜ
生きるのが
悲しくて
涙を
こぼさなくてはならないのか
なぜ
こんなに
短い生命を
守らなければならないのか

求めるものは　雪よりも
はかないのに
それでも
生きるのを
ヤメようとしない俺

（1970年8月9日、20歳）
「宮村時男詩集　歩けなかった僕の足あと」より

落合勇平さん

落合勇平編「宮村時男詩集―歩けなかった僕の足あと」（かりん舎）は1050円。問い合わせは同舎☎011・816・1901、ファクス011・816・1903へ。ホームページ（http://kwarin.jp/wp_blog/）からも購入できる。

（２０１３年５月１３日付　北海道新聞夕刊より）

1977年12月3日　第3種郵便認可　毎月18回(1,2,3,5,6,7の日)発行　2013年7月4日発行　SSKP　増刊通巻第5440号

渡辺一史

書くって何だろう

人生を深いところで支えるもの ㊦

前回、落合勇平という私の友人が編集した「宮村時男詩集―歩けなかった僕の足あと」について書いた。

勇平は筋ジストロフィーと闘いながら、東京で暮らす31歳の青年だった。同じ筋ジスで亡くなった伯父（勇平の母の兄）が書き遺した詩を、詩集にして出版したい、と私に相談を持ちかけたのが一昨年のこと。しかし、勇平は刊行直前の3月に世を去った。

大きな反響をいただいた。先月の夕刊が配達された直後から、出版元のかりん舎には100冊近い注文が入ったという。もともとこの詩集は「地方・小出版流通センター扱い」であることから、書店の店頭にはほとんど並んでおらず、売り上げはゼロに等しかったのだから、私たちにとって大きな励みになるとともに、あらためて「書くこと」「伝えること」の大切さを思い知らされる体験ともなった。

生きることの苦悩

詩の作者である勇平の伯父、宮村時男さんは、今から60年以上も前の1949年に、高知県で生まれた。

当時は、特別支援学校が併設された「筋ジス病棟」が全国各地に整備される以前であり、医療的・福祉的なサポートなど得られないに等しい時代だった。小学校3年で歩けなくなったことから、お兄さんに自転車で送り迎えをしてもらいながら、どうにか初等教育は終えたものの、中学以降は学校にも通えなくなった。それでも、本を読むのが好きだった時男さんは、14歳の頃から詩作に熱中するようになり、23歳で亡くなるまでの生涯に227篇の詩を遺した。

時男さんはいつも居間に敷いた布団の上に座り、窓から日がな一日、家の前で働く人などを眺めて暮らしたという。生家は高台にあって、障子を開けるとナシ畑や田んぼが広がる。そこから見える120度くらいの視界が、時男さんの世界のすべてだった。寝そべったら、もう起き上がれなくなるので、家族を呼んで起こしてもらう。しかし、そんな時男さんの内部には深遠な精神世界があったのだ。

「生きることが／無意味で／悲しい夕暮れ時／キリキリと／こんなにも／心が／悲しみに痛む時／僕は／いつも／あこがれた／あの大空を／雲のように／幸福を求めて／旅するのです」

時男さんは、自らの人生を「涙に濡れた人生」と書き、筋ジスのため「花よりも短い生命」なのに、なぜ自分は生きなくてはならないのかと、詩の中で何度も繰り返し自問している。また、幼なじみだった同級生の「かよちゃん」に恋心を抱きながらも、病気の自分が恋をするのは「罪悪」なのかと、その切ない胸のうちを詩に書きつづってもいる。そうやって、もろくも崩れ落ちそうな思いを、そして、精神の均衡を、どうにか保ち続けていたことがわかる。

時男さんの詩には、生きることの苦悩や孤独感が凝縮し、単に「筋ジス」という境遇を超え、誰しもの心に強く訴えかけてくる透明感がある。

思いに報いること

勇平は勇平で、そんな伯父の詩を読みながら、もし「生まれ変わり」という現象があるのだとしたら、伯父の魂が自分に宿り、その悲願を叶えようとしているかのような運命を感じたと書いている。

「私の手で出版を実現して、多くの人に伯父の詩を読んでもらいたい。伯父が不自由な体で、不自由な時代を生き、そして、精一杯に書き、歩んだ、その『足あと』を、この世に残したいのです」

それにしても、と私は思う。そもそも、私が勇平と出会うきっかけとなった「こんな夜更けにバナナかよ」という本を刊行した際にも、私は主人公である筋ジス患者・鹿野靖明さんの死に間に合わせることができなかった。そして、今回もまた、詩集の刊行を目前にして、勇平は逝ってしまった。私は冷たくなった勇平の死に顔と対面しながら、言葉では言い表せない無念さを噛みしめるほかなかった。

結局のところ、私にできるのは、彼らの「足あと」を少しでも長く、強く、この世に刻みつけること。それ以外に、彼らの思いに報いてやることなどできはしないのだ。

（わたなべ・かずふみ＝フリーライター）

詩は心の友　宮村時男

この真っ白いノート
この白いページに
今日も　書くのです
誰にも　言えない
心を　ノートに映すのです
いつわりはないのです

それが
たとえ　悲しみの
涙に　濡れようとも
つらく
苦痛なもので
あっても　いいのだ

一歩　一歩　歩む
僕の若い日の
そして人生の
思い出と　なるなら
足あとに　なるのなら……

（1969年2月1日、19歳）
「宮村時男詩集　歩けなかった僕の足あと」より

伯父の遺した詩を この世に出す運命 勇平を突き動かす

宮村時男さん

落合勇平編「宮村時男詩集―歩けなかった僕の足あと」（かりん舎）は1050円。問い合わせは同舎☎011・816・1901、ファクス011・816・1903へ。ホームページ（http://kwarin.jp/wp_blog/）からも購入できる。

1977年12月3日　第3種郵便認可　毎月18回(1,2,3,5,6,7の日)発行　2013年7月4日発行　SSKP　増刊通巻第5440号

渡辺一史の ぼくらの福祉

その1

「できない」を「できる」に

落合勇平が、東京・板橋で一人暮らしを始めて1年になる。

「どうだい？」と聞くと、「今は五感をめいっぱい使わなきゃ、生きてけない感じですね。親と暮らしていた頃は二感くらいで生きてた気がする」。

勇平は3歳で筋ジストロフィーの診断を受けた。小学3年で車いす生活、24歳の今も筋力低下は進む。だから、一人暮らしといっても、彼には24時間の介助が欠かせない。それでも自立して生きてみたいと、昨年、埼玉の実家を飛び出した。

のべ13人。勇平が1週間に介助を受けるヘルパーの数だ。

「介助者にもいろんな性格の人がいて、何度同じことを言ってもわかってくれない人、要領の悪い人……もう人間関係の波にほんろうされまくりです」

以前『こんな夜更けにバナナかよ』という本を書いた。在宅で暮らす筋ジス患者を2年半取材した。手足が動かず、介助者に「あれしろ、これしろ」と容赦なく要求する。「いいかげんにして」と思う。それでもメゲない。彼の貪欲さが、しかし多くの若者を変えてゆくのを目の当たりにした。人との出会いの中で、「できない」は「できる」に変わる。障害者が一生を施設や親元で過ごしていれば、そうした出会いは生まれない。

（わたなべ・かずふみ。68年生まれ。フリーライター）

渡辺一史の ぼくらの福祉

その2

なぜ平等を金で買うのか

落合勇平の最近の気がかりは、何といっても、国会で審議中の障害者自立支援法案だ。

筋ジストロフィーの勇平の生活を直接左右する法案。しかし多くの人は知らないだろう。メディア報道も、郵政民営化法案の100分の1に満たない。

「自立を支援する」というこの法案、名前を見る限り異論はなさそうだが、しかし、多くの障害者が、「自立支援どころか自立阻害法である」と反対の声を上げている。勇平も、電動車いすに乗ってのデモ行進や国会傍聴、学習会に忙しい。

「デモした感想はどう？」

「声届いてんスかね。はっきり言って誰も聞いてないんじゃないかってむなしくなった」

私も以前は聞いていなかった一人だ。健常者にとって、福祉とは、何より「負担」のことであり、だから、この不景気に「なにが福祉か」とつい思う。

一体、この法案の何が問題なのか。一番の問題は、財政難から「利用料の原則1割負担」が導入されること。低所得者の減免措置はあるが、原則的に介護にかかる金を障害者が負担せねばならない。「それってトイレへ行くにも、かゆいところをかくにも金をとられるってこと。結局『生きるな』って言ってるようなものじゃない」

障害があってもフツウに生きてゆける社会。それがノーマライゼーションの理念なのに、その「平等」をなぜ金で買わねばならないのか――。結局のところ、自分が当事者になったとき、初めて思い知る、日本の福祉の冷たさを、なのである。

1977年12月3日　第3種郵便認可　毎月18回(1,2,3,5,6,7の日)発行　2013年7月4日発行　SSKP　増刊通巻第5440号

渡辺一史のぼくらの福祉

その3

思いつめた青年

私が落合勇平と出会ったのは2年前のことだ。立教大学に「共生社会学」という授業があり、私がそこのゲスト講師に呼ばれた際、たまたまその大学に筋ジストロフィーの学生がいると知り、学生たちの前で体験を語ってもらった。当時、勇平は文学部史学科の3年。電動車いすで大学へ通っていた。

「あと何年生きられるのかと思うと涙が出そうになる」。教壇の勇平は泣きそうだった。

「正直、言葉に詰まるから、本当は自分のことや障害のことは話したくないんだけど」

酷かなと思いながらも話をうながした。筋ジスは進行性の病気だ。影法師のようにつきまとう筋力低下、そして死と日々向き合わねばならない。

しかし心配は無用だった。勇平の思いはたちまち学生たちに伝わり、教室には異様な緊張感がみなぎった。一人の学生がおずおずと質問する。「病気があるだけでツライのに、なんで大学に通おうとするんですか?」

「それは毎日思ってて。朝起きるたびに思ってて。どうせ死ぬのに、なんで勉強なんてするんだろう。こんなことしても意味ないんじゃないか。本当にしたいことを見つけなきゃって、いつもそう思ってるんだけど」

授業後、提出された学生たちの感想カード。

《落合さんの話を聞いていて涙が出そうになりました。命の期限があるのは私も同じ。私はなんでここにいるんだろう》

教科書の知識は人を打たない。勇平の思い詰めた表情が、確実に何かを伝えたようだ。

渡辺一史のぼくらの福祉

その4

今どきの若い障害者

「ぁぉ…ちぁいくぅ」

――すいません。もう一度。

何度も聞き返した。脳性まひの原田華代さんの言葉が、私にはなかなか聞き取れない。

筋ジストロフィーの落合勇平が大学卒業後、お世話になっている東京・板橋の自立生活センターを尋ねた。NPO法人「レイ」理事長の原田さんは、上体を右へ左へと動かしながら話す。脳性まひに多くみられる不随意運動と言語障害だ。私には脳性まひの友人が多いので、会話にも慣れているものと思っていたがショックである。

見かねて、介助者の竹蓋真弓さんが「通訳」してくれる。

「落合くんも最初は自信なさげだったけど、『大丈夫あなたならゼッタイやればできる』といって励ました、そうです」

親元を出てアパート暮らしを始める勇平をサポートしたのが40代の原田さんだった。原田さん世代の障害者の活躍が、それまで施設一辺倒だった日本の福祉を揺るがした。今では自立を支援するセンターが全国にでき、生活上の相談などに乗る。

「で、最近の勇平はどうですか。たくましくなりましたか」

「なった。うちのホープだからねー。これからが楽しみだ」

でも、小言も少し。「昔は差別がひどかったから、それと必死に闘った。今は少しだけ生きやすい環境が整って、その分、若い障害者には『なにがなんでも』って根性が欠けてます」

「それって、健常者の〝今どきの若者たち〟と似てますね」というと、原田さんは「そうなのよ」と笑った。

1977 年 12 月 3 日　第 3 種郵便認可　毎月 18 回(1,2,3,5,6,7 の日)発行　2013 年 7 月 4 日発行　SSKP　増刊通巻第 5440 号

渡辺一史の

ぼくらの福祉

その5　完

障害があってもなくても

いま多くの若者が「福祉」を学ぶ。介護やボランティアへの関心も高い。なのに、日本の福祉が前進している気がしない。

東京・板橋のドーナツショップ。筋ジストロフィーの落合勇平と、彼の介助者の卜部亮（23）くんと、お茶しながらの長話。

卜部くんはサッカーの稲本選手に似た、さわやか好青年だ。勇平と同い年の24歳で、都内の専門学校で介護を学んだ。

「就職率がいいって入ってくる学生が多いですから。でも、向いてないって、クラスで7、8人はやめたと思う」

介護労働者の定着率もきわめて低い。1年以内に21%がやめるという（介護労働安定センター調べ）。彼らの問題は、昨今の「フリーター」や「ニート」といった問題とも深くかかわる。多くの若者は社会を前に立ちすくみ、なかなか自分が定まらない。一方で、勇平の所属する障害者団体では現在ヘルパーの養成研修を行っている。これからは障害者自身が介助者を育て、若者を支援してゆく時代でもある。

地域へ――。この10年、多くの障害者が街で暮らし始めた。それを支える日本の福祉はまだ問題だらけだ。しかし障害者の自立が、やがて地域を変え、まわりの人を変えてゆく例を、私は取材でたくさん見てきた。

「結局は『どう生きるか』なんだよね。障害があってもなくても」。勇平はそういって、電動車いすのリクライニングを「ウィーン」と上げる。

（わたなべ・かずふみ。68年生まれ。フリーライター）

（２００５年７月１８日～２２日付　朝日新聞朝刊より）

1977年12月3日　第3種郵便認可　毎月18回(1,2,3,5,6,7の日)発行　2013年7月4日発行　SSKP　増刊通巻第5440号

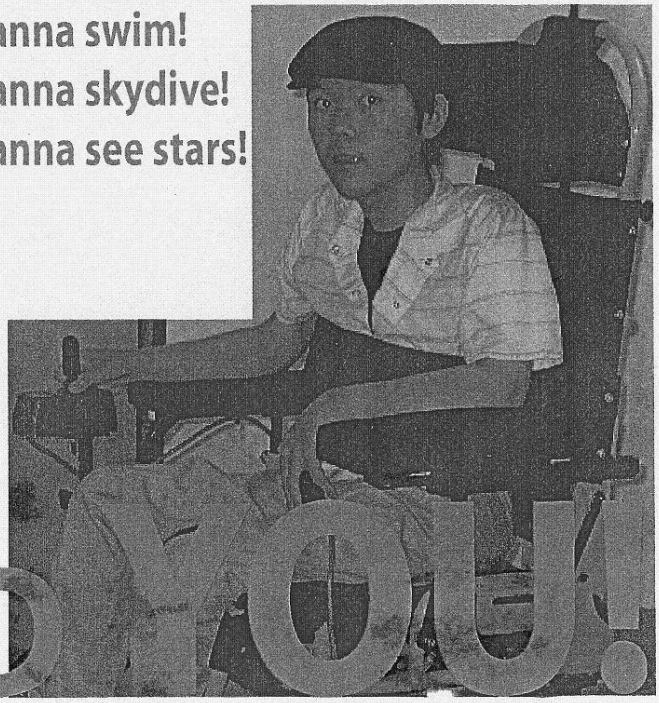
わたし、落合勇平は筋ジスをやってます。

in/dependentな生活をおくってます。

親元を離れた、ヘルパーとの毎日は順風満帆。万事快調。
ところが、ふと、プールに行ったり、スカイダイビングをしたり、星を見に行ったり、したいときがあります。でも、ヘルパーのサポートだけではこういったことはできません。
そこで、いっしょに出かけてくださる方を大募集。

現在、LESSONSというグループをつくって活動しています。
LESSONSは“Let's Enjoy Struggles on Society”の略で、定期的に小旅行をするあつまりです。
LESSONとはゆるやかな意味です。介助技術を習得してもらうためのLESSONから、ともにいるためのLESSONまで。
介助内容は車椅子への移乗、トイレ、外出の付き添い、食事介助/簡単な食事準備。
経歴・経験不問です。どうぞお気軽にお問い合せください。

I wanna swim!
I wanna skydive!
I wanna see stars!



I NEED YOU!

Let's Enjoy Struggles on Society
LESSONS

連絡先:落合(文4)

大学生当時の
介助者募集チラシ

《編集》自立生活センター・小平
〒187-0003　東京都小平市花小金井南町
１－２６－３０　パラシオ102
TEL/042-467-7235　FAX/042-467-7335
Ｅ－ＭＡＩＬ：cilkodaira3@hotmail.com

《発行所》
障害者団体定期刊行物協会
東京都世田谷区砧6-26-21
（定価　100円）